



神戸における名儀不詳地名の分析

吉田, 茂樹

(Citation)

兵庫地理, 22:40-50

(Issue Date)

1977-04-30

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002296>



神戸における名儀不詳地名の分析

吉 田 茂 樹

1. 序 論

昨今、巷では地名の研究が盛んであり、それはそれとして、極めて好ましいことであり、このような中であって、好著というべき『神戸の町名』が神戸新聞社より出版された。このような郷土中心の広範囲な地名の解説書は極めてめずらしく、かつ、貴重といわねばならない。神戸の町名解説については『西撰大観』に福原潜次郎執筆の「神戸市地名考」²⁾があり、その後、福原会下山人と名乗って、『神戸市内町名由来記(上中下3巻)³⁾』を発表されている。これらは主として神戸の旧市内の地名解説であるが、福原会下山人は明治時代からの郷土史家として知られ、神戸に限らず、西撰一帯に幅広く地名の由来を解かれている。部分的に検討の余地があるけれども、早くからこれだけの解説には敬意を表したい。その後、条里制の研究で知られる落合重信の「神戸町名解説粗稿」⁴⁾や、川辺賢武の「神戸の町名物語」⁵⁾が発表され、それぞれ自説をふまえての解説であり、大いに参考たり得る。これらは論考というより短い解説をたてまえとされていて、論考は別に史学雑誌などに発表されているようである。落合は別に『神戸の歴史』⁶⁾において、古代から中世あたりにかけての地名の名儀にもかなりふれられている。こうした先考をふまえて先の『神戸の町名』が成立したようであり、特に神戸新聞社の橋川真一・有井基がその中心になられたようである。この書は前出の先人が神戸旧市内の町名を中心としているのに対し、北区・垂水区などの新市域を含めての町名解説であり、フィールドにおける調査の結果をも発表され、極めて内容の深いものである。これらによって、神戸の町名の八割以上がその名儀を明かにしたようであるが、なお不明なものも多い。特に歴史的にも成立の古い著名な地名の多くが名儀不詳となっており、このような場合、全国的視野で解明せねば解決の糸口がつかめそうもない。論者も非力ながら全国の古地名を蒐集し、その分布や立地から、名儀や地名の移動を考究しており、これによって、残された神戸の名儀不詳地名の一部でも明かになればと思い、一文を提するものである。本論として、幾つかの地名の論説をあげ、付論として研究不十分なものの私見をあげておきたい。

2 本 論

(1) 有馬(アリマ)を中心とする「有(アリ)」の基本的解釈

有馬をアイヌ語で「燃える谷」の意とする説や、古語で山をアリといったから、アリマは「アリ(山)マ(土地)」とする説などがあるようである。後者については中島利一郎の説を落合重信までが興味を示されており、山中襄太も『地名語源辞典』⁹⁾でこの説を魅力的に扱っておられる。前説については、全国のアリマの地名分布からして、ほぼ完全に否定され、論者は今だに近畿地方からアイヌ語地名を見出すことができない。さて、後説の山をアリというのは如何にも自然環境が合致するようであるが、論者は否定せざるを得ない。何故なら、『岩波古語辞典』をはじめ国語辞典には「アリ」を山の意と明記したものはなく、古典にもそれらしき語句はない。山がアリではなからうかと強いてあげるならば、『紀歌録98』の「わが逃げ登りしアリヲのはりの木の枝」という一節であろうが、これに関して、『岩波古語辞典』はアリヲを「在り尾」として、「目につく稜線。また、岡。」としており¹⁰⁾、『広辞苑』は「あり丘」として、「荒いけわしい山。一説にはそこにある山。」としている¹¹⁾。論者は後者の「荒いけわしい山」の意により興味をもつものである。さて、全国から「アリマ(有馬・有間)」なる地名を拾ってみると次のようである。

- ① 宮城県栗原郡金成町有馬(河川の上流の丘陵地の河谷)
- ② 群馬県渋川市有馬(『和名抄』の有馬郷、利根川の河岸で河谷)
- ③ 埼玉県秩父市有間山(秩父市南方にある山岳名)
- ④ 神奈川県川崎市有馬(台地開折谷の最奥地)
- ⑤ 新潟県上越市有間川(河川名で上流から河口までが狭小な谷川)
- ⑥ 愛知県東加茂郡旭町有間(これはアンマと呼ぶが同系とした。狭小な河谷)
- ⑦ 三重県飯南郡飯高町有馬野(狭小な河谷)
- ⑧ 三重県熊野市有馬(海岸立地であるが古くからあり背後の山地も含む)
- ⑨ 大阪府(『延喜式神名帳』に「阿理莫社」あり、津田川の河谷か)
- ⑩ 兵庫県神戸市北区有馬(温泉地の山谷とも、下流の有馬社のある有野が、もと有馬野ともいったというが、いずれにしても山地の河谷に立地)
- ⑪ 広島県山県郡千代田町有間(山地の河谷)
- ⑫ 高知県土佐郡土佐町有間(狭小な深い山谷)
- ⑬ 長崎県南高采郡南有馬町有馬川(海岸の町名と内陸の河川名)

この他、小字などに多少あるかも知れないが、論考には十分であろう。本来は地形図を示すべきであろうが、所在地をあげて立地状勢を示したので研討された。この中で、⑨の位置は吉田東伍の『増補大日本地名辞書・上方(2巻)』に「阿里麻川、有真香(アマカ)とし東葛城村より貝塚へ流れる¹²⁾」とあるので、阿間ヶ滝町のある津田川と解釈した。これによって知られるように、ほとんどが山地の河谷に立地する。しかも、どちらかといえば僻地の山村といった地名である。このことから、温泉に関係づけたアイヌ語地名などは完全に否定されるが、アリを山とする説には都合よくみえる。有馬の「有」のみを山の意とするのは容易だが、他の「有沢・有山・有岡・有浦・有海・有畑」などは如何に解釈するかである。「有一」という語頭型の地名を、すべて同儀とするわけにはできないが、語尾型がまれでほとんど語頭型の地名となっている点から、「有」の基本的解釈は形容詞とみてさしつかえない。日本の古語でそのような形容詞が存在しなければ、何かの語の音韻交替と考える必要がある。そこで、これによく似た地名をあげると、例は少ないが「荒間(アラマ)」というのがある。

山梨県北巨摩郡長坂町小荒間

富山県小矢部市荒間

ともに奥地の河谷に立地し、「アリマ」の立地と同型である。論者は「アリマ」は「アラマ」の転化と考えたい。これであれば「荒々しい谷間。人気のない僻地の谷間」の意となり、有馬のみならず他の「有一」の地名の大部分はこの解釈で十分であろう。「有」が山の意であれば、「有山・有海」などの解釈に困るが、「荒」であれば問題はない。「アラ」が「アリ」に転化する例としては、「荒磯(アライソ)」を「アリソ¹³⁾」と呼ぶことで十分であろうが、蔵中進の『上代日本語音韻のー研究』においても、「a-oの交替だけに留るものではなく、a-o-iの三つの母音間にわたる交替現象として捉えることができる¹⁴⁾」とあり、「ara → ari」は当然であろう。更に付加すれば、徳島県香美郡香北町に「有川(アラカワ)・有瀬(アラセ)」なる地名があって、ここでははっきり「有」を「アラ」と呼んでいる。以上のことから「有馬(アリマ)」は「荒間(アラマ)」であって、古くは荒れはてた人気のない谷間であったから、このような地名となったものであろう。なお、「アラ」には「荒」と「新」があり、本来同源であって、「荒れた、人気のない」という意と、「新しい、開拓したばかりの」という意がある。今一ついえば、「有明(アリアケ)」の「有」は別語であって、「ア(有・在)リ」という動詞形が中世以後地名化したものである。「有一」の多くは「アラ(荒・新)」のいずれかと考えてよさそうである。

(2) 須磨(スマ)名義論

神戸の「須磨(スマ)」については、松岡静雄の「ス(栖)マ(間)。居住地の意」¹⁵⁾説、『日本地理志料』の「摂津国の西南のスミ(隅)がスマとなった」という説、落合重信はよくわからないとしながらも、「スマのスに洲の意があり、マは播磨・有馬・飾磨・但馬などにみられるように土地をさしたのかと思われる」という考え方¹⁶⁾、これをうけついで『神戸の町名』の編者は、「地形からみて遠浅のつづく浜があり、洲浜(スハマ)といていたのが、洲間(スマ)となったというのが一番自然であるようだ」¹⁷⁾など説がわかれている。論者の地名研究からして結論をいえば、「須磨(スマ)は隅(スミ)の転化」ということになる。「スマ(栖間)」説は漁師のよき住地というだけで何の根拠もなく、「洲間(スマ)」説も従い難い。須磨という地名が砂浜海岸から生じたものであれば、全国の砂浜・砂地にもっと「スマ」なる地名があってよさそうだが、ほとんど存在しない。周知のように砂地を代表する地名に「スカ(洲処)」というのが一般的であり、神戸の須磨のみを「スハマ」とするには論拠が不充分であろう。さて、全国から「スマ(須磨・須万)」なる地名を拾ってみると次のような例がある。

- ① 兵庫県三田市須磨田(『有馬郡誌・下』¹⁸⁾では本庄村須磨田とある)
- ② 兵庫県神戸市須磨(竹内理三編『荘園分布図上巻』¹⁹⁾の「須磨庄」)
- ③ 島根県邑智郡石見町須磨谷
- ④ 山口県徳山市須万
- ⑤ 山口県玖珂郡錦町須万地
- ⑥ 福岡県行橋市須磨園
- ⑦ 京都府舞鶴市須磨通
- ⑧ 宮城県志田郡松山町須磨屋

神戸の須磨が海岸に立地するほかは、いずれも奥まった平野・盆地の端に立地する。ただ、『日本地理志料』のいうように、必ずしも围郡界の端にあるのではなく、平地の行きつまったスミ(隅・角)に立地するようである。ともかく、スミがスマとなったことは確実で、先の arama → arima と同様に、sumi → suma の母音交替であろう。この論拠として、岩手県盛岡市加賀野に「角子」という地名があり、「スミコ」でなく「スマコ」²⁰⁾と呼んでいることから知られ、この集落も盛岡市街の山麓の隅に立地する。京都府久美浜町に「出角(イズスミ)」とい

う集落があり、平地の行きつまった山麓にあり、「スミ(角)」も「スマ(須磨)」も同じ立地である。従って、神戸の須磨は摂津の西南の隅というより、六甲山南斜面に形成された扇状地式三角州の平地の隅であって、須磨から西は断崖の行きつまりであったから「スマ(隅・角)」と呼ばれたものであろう。

(3) 生田(イクタ)の「イク」名義論

生田というのは極めて一般的な地名でありながら、これを明快に解釈しているものはない。福原会下山人は「生田(イクタ)とは丸い田の意である²¹⁾」とし、地形的な状況からのべられたようであるが、なぜ、「イク」が丸いという意であるかは説明されていない。他の郷土史家の多くは、単に生田神社があったから生田という地名が生まれたかのように示されるのみである。「生一」という語頭型の地名は全国に極めて例が多い。「生田・生野・生坂・生島・生地・生谷・生名」などであるが、困ったことに、これらがすべて「イク」と読まれず「イキ・イカ・イケ」と読むのもあり、「生(イク)」をすべて同義として捉えにくい。従って幾つかの語源が考えられようが、大部分は「生」をイクと読んでおり、「生」の基本的な解釈だけは許されよう。そこで、「生田(イクタ)」を如何に解釈するかは難しいのであるが、『神功紀』に「広田・生田・長田」の三社を列記しているところに第一の解明の手がかりがありそうである。つまり、広田・長田と同じように生田の「イク」は形容詞であることにほぼ間違いはない。ところで、「イク」なる形容詞は古語に存在しないで、何かの音の転化であろうと考える必要がある。『和名抄』の中に讃岐国多度郡に生野郷があり、これに「イカノ」という訓注がある。これが第二の手がかりであって、先にもふれたように「生」にはいろいろ読み方があるが、古文獻に限ると「イク・イカ」に限られる。従って、「イカ→イク」の転化と考える必要がある。しからば「イカ」とは何か。『岩波古語辞典』によると「イカ(厳・重・茂)²²⁾し」というのがあって、「①勢いが盛んである。植物の繁茂にいうことが多い。②立派でおごそかである。③鋭く強い。④はなはだしくて大変である」などの意がある。①～④から地名に用いられそうなのは①ぐらいであろうが、②の意も注目せねばならない。『神功紀』は神話化された中にあっての「広田・生田・長田」の命名かと察せられ、いずれも、大きく広い、立派な田の意として共通する地名である。皇祖による佳名として共通する地名であろうから、生田は「イカタ」の転化と考えたいのである。『祝詞』の祈年祭に「八束穂のイカレ穂に皇神たちの依さし奉らば」というのあり、この「イカレ穂」とはよく実った穂のことで、「広し、厳し、長し」という同系の形容詞とし

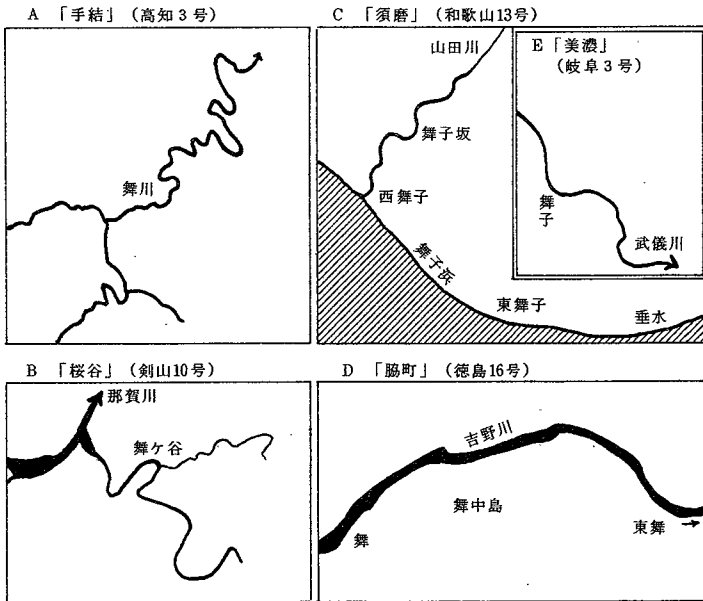
て捉えるならば、「広田・生田・長田」並列の地名の名儀も納得されるのではあるまいか。結論として、生田神社の「生田」とは「よく実った田」としておきたい。地名一般論からすれば、「生一」の多くは、「よく植物が繁茂したる」という形容詞であろうと解釈したい。兵庫県「朝来郡生野（イクノ）町の周辺には見事な樹林帯が多く、古くから植生の豊かな原野であったろう」以上によって、「生田（イクタ）」は「イカタ」の転化であろう。

(4) 舞子(マイコ)名儀論

舞子について、『西撰大観・郡部』に「①平相国清盛又は行平郷此地の風光を愛して、白砂青松の浜辺に児女をして舞曲をなさしめたるに起る。②此辺潮水の回ひ込む処なるを以て回ひ込みの浜という。③古歌の(播磨なる舞子の浜の乙女らが立舞ふ袖のすずしくも見ゆ)といへるに基く。④或僧侶墮落して此地に來り常に松樹を削りて器を作り、又土器を焼きて茶碗等をひさぎ、傍ら女兒に舞を教ゆるを内職せり、故に舞子の浜と呼ぶ。」²⁸⁾などの説があげられている。しかも、舞子の地名は元文(1739年)以後のものであるという。このような新しい地名で名儀が明らかでないのが不思議だが、全国で「舞」のつく地名は青森県から九州まであり、「舞戸・舞川・舞谷・舞鶴・舞子・舞立・舞ヶ辻・舞中島」など種類が多く、また「米(マイ)」の地名の多くもこれらと同儀が多いかと思われる。ただ、注意せねばならぬのは東北北部にある語尾型地名の「一マイ(米・舞)」はアイヌ語地名の可能性が強く、区別せねばならないことであろう。西日本においては「舞一」も「一舞」も比較的成立の新しい日本語地名とみて誤りはないようである。さて、先の諸説の中で、舞姫と関連づけた文学的解釈で「舞子」の地名が成立した可能性はあまりにも乏しい。多くの「舞」なる地名は極めて厳しい環境に立地し、舞姫の舞台にふさわしい場所はあまりにも少ないのである。この中で、②の潮流が舞い込むというのが最も現実的であり、郷土史家の多くはこの説を支持するようである。たしかに、愛媛県佐田岬の先に「見舞崎」というのがあって、潮流と関係した「水舞崎」であろうと思われる。しかし、「舞子」なる地名は、図(E)で知られるように、内陸の河川の蛇行する部分にもある。そこで論者は、海水が舞い込むより陸地の形状に関係した地名だろうと考へたい。さて、「舞(マイ)」は「廻(マハリ)」と同様であって、「大きく迂回する。くるくる廻る。」という意であって、地名の命名からは「曲(マガリ)」と大差はないようである。図(A・B)で知られるように、「舞」なる地名の多くは苦しいメアンダーを示す河谷にある。中には、図(D)のように吉野川がゆっくり大きく迂回したと

ころにもみられる。そこで神戸の舞子であるが、図(C)の舞子浜が有名であるが、もともとどのあたりが地名の発生源かはっきりしない。このあたりは、垂水村大字山田村字舞子であるが、してみると山田川の下流の蛇行部分が舞子坂となっており、河川の蛇行付近から成立した可能性が強い。前面の海岸は、古くは山田の浦と呼ばれ、『播磨鑑』では「舞子浜は山田の浦」とあり、山田川の河口付近も示しているようである。もっと広くとれば、図(C)で知られるように、明石から垂水にかけて陸地が大きく曲線を描いて突出しており、このような地形を「舞」といったかも知れないが、他の諸例から山田川の一部の地域を「舞子」と呼んだものであろう。潮流の舞う浜辺というのももっともであるが、一般的には

図. 地名「舞」の立地と水路図 (5万分の1地形図より作成)



内陸の河川や谷の屈曲の著しいところを「舞(マイ)」と呼んでおり、潮流説には従い難い。

3. 付 論

(1) ウズモリ(渦森・渦ヶ森)〔東灘区〕

これを京都や大阪にある太秦(ウズマサ)の転化とする考えが強いが、どうであろうか。あまりにも谷の奥まった山谷に立地し到底納得できない。ウズマサとは秦(ハタ)、つまり朝鮮半島の新羅あたりからの古代渡来人の居住地であるが、弥生式時代以前までさかのぼればともかく、古墳時代から奈良朝にかけての渡来人(特に近畿周辺では天皇氏に仕える帰化人として)の居住地は、もっと生産性のある平地に面したところに立地する。これは、ウズ(渦・宇津・埴)やウツ(宇津・現)・ウト(宇戸・宇都)・ウチ(内)などと関係する地形的名称と思われる。谷の入りこんだところで、ウチモリ(内森)の如きであろう。

(2) ミカゲ(御影)〔東灘区〕

ミカゲ(御影・神影・花崗)なる地名の立地は一定しない。どうも自然地名というより文化地名らしい。このあたりにいた豪族凡河内氏の祭る「天之御影命」と関係するというのが、御影町には天神社が残り、同じ北区にもミカゲ(神影)町があって、近くに神田なる地名がある。また、金沢市の神田町に隣接して、やはり御影町がある。なお、『延喜式神名帳』に「弥加宜(ミカゲ)社」が京都府舞鶴市志楽にある。吉田東伍の『地名辞書』では「息長系丹波道主王、彦坐王は淡海の天之御影神」云々がある²⁵⁾。このあたりは論者は素人であるから、史家の研究にゆだねたい。いずれにしても、「御影」は神名と関係した地名であろう。

(3) アマギ(天城通)〔灘区〕

川辺賢武による甘味料のとれる木というアマキ(甘木)²⁶⁾説と、福原会下山人のアマシキ(天城→天敷)²⁷⁾説が対立する。アマシキとは野に対して山の手のアマ(天)、シキ(磯城・敷)は神を祭る場という。甘木説は新味があって興味深いが、甘木という木がはっきりしない。「アマ」には「天・尼・雨・海土」など当て字も多ければ地名例も著しく多い。論者もまだ整理し得ないが、山麓の場合は、アマ(天)、つまり上の方、高い方という意が強い。アマシキ(天敷)説をそのまま受け入れることはできないが、この方がより合理的な解釈である。福岡県の甘木市も山麓にあり、上の方の土地とか集落という意がより合理的に思える。

(4) サビエ(佐比江)〔兵庫区〕とスサ(須佐)の入江〔兵庫区〕

『西撰大観』には「佐比江の佐比は須佐備の意義である、西の入江を須佐といひ東の入江を佐備といふのは同じ対照である」とし、須佐とはアレ(荒)スサブという。須佐の入江は『万葉集(2751)』に「渚沙の入江」としてみえる古地名であるが、多くはスサノオノミコトと関係づけた解釈である。スサノオノミコトの「スサ」と「スサ(荒)び」は同じ意味であるが、これがそのまま地名化したことは疑わしい。「スサ」という地名は少なく、島根県の須佐神社を除くと、山口・兵庫・愛知の「須佐」は、いずれも湾入した海岸に立地し、和歌山県の周参見(スサミ)も湾入海岸にある。川辺賢武によると、「スサ(洲砂)」の意としているが、²⁹⁾少くともスサの「ス」は洲の可能性が強い。佐比江の「サビ」は、川辺によれば「サへ(塞)」の転化で、塞の神を祭ったところとして³⁰⁾いる。しかしながら、「サへ・サイ」が「サビ」に転化した例がはっきりせず、むしろ『西撰大観』による「スサビ」とほぼ同儀の「サビ(荒・寂)」と考え、「荒涼たる淋しい入江」あったから地名化したかも知れない。

(5) オオゾウ(大沢)〔北区〕

『神戸の町名』によれば、「八多の大蔵山奥蔵寺と関連づけて起源を説く人もあるが、一方でソウレ・ソと同じく切替畑とする人もある。いくらでも説は立てられるだろうが、大きな沢があったとするが現在では、最も納得しやすいのではないか」としている。³⁰⁾しかし論者は、ソ・ソウ・ソウレの焼畑(切替畑)説をとらざるをえない。「大沢」をオオサワと読み、しかもそのような地形にあれば納得できるが、北区大沢町はなるほど谷沢の地形にみえるが、小河川の最上流部でしかも傾斜地である。今日の大沢部落は上流に溜池を作って水田化したところで、水利の悪い当初は畑であったと考えねばならない。近く的美藝郡吉川町にも「大沢(オオソ)」という集落があり、谷筋であるが集落は傾斜地に立地する。(2万5千万1地形図「三田」参照。) このように「大沢」をともに「オオソ・オオゾウ」と呼び、「オオサワ」と呼ばないのは、それが転化したのではなく、もともと「オオソ・オオゾウ」であって、「大沢」という当て字を用いたに過ぎない。すでに論者が示したように、³²⁾「谷」と「沢」は親不知一桑名線で対立分布し、西日本での「サワ(沢)」は溪谷としてでなく、池塘・低湿地の意として用いられ、決して河川の上流の山地斜面には存在しない。西日本一帯には「大沢・大曾・大僧・大草」なる地名が山地斜面に多く、東日本に多い「オオゾウリ(大草里・大沢里・大草履・大雑里)」や「オオゾウレン(大草連・大蔵連)」及び「ソウリ(草

里・双里・雜里・相里)」などに対応する焼畑地名にはかならない。

(6) カラト(唐櫃)〔北区〕とコマガバヤシ(駒ケ林)〔長田区〕

有野町の唐櫃について『神戸の町名』は、「諸説があるが唐人(カラヒト)の居住地であった説は捨て難い」とし、古くから唐櫃(カラビツ)³³⁾があった説を否定する。「カラト(唐櫃・唐戸)」なる地名は、東北から九州まで分布し、河川の上流や、小河川のほとり、水の乏しい島などにあり、詳論は控えるが「カレト(枯戸)」の転化とするほかはなく、「唐(カラ)」をすぐ渡来人の「カラ(韓・加羅)」と結びつけるのはつつしまねばならない。韓国という古社名があることだから、「唐一」なる地名の一部に韓人と結びつく面もあろうが、多くは韓人とは無関係であろう。有野町唐櫃は六甲山北麓の有野川最上流部で、花崗岩の崩土の堆積したところの小河谷で水枯れを生じやすい。扇状地の河川の伏流しやすいところにもこうした地名(岩手県北上市唐戸崎)があり、この「カラ(唐)」は「カレ(枯)」とみるのである。同じように、長田区の駒ケ林町の「駒」を「高麗(コマ)」とし、渡来人とする説も付会に過ぎない。これについて、『神戸の町名』が、「コマは河間、または入り込んだ地形を示す古語」と説明するのは正しい。もと、妙法寺川の分流があった河間とするのが正しいようで、古くは「小馬(コウマ)」と呼ぶ島があったのであれば、「カハマ(河間)」が「コウマ→コマ」と転化したことになろう。神戸市で渡来人に関係ありそうな地名としては、北区八多(ハタ)町であろう。『和名抄』の「幡多郡」であり、古地名の「幡多・波多・幡太・波太・秦」などは近畿地方を中心とする分布であり、その一部は最近、金達寿・段熙麟³⁴⁾などによって明らかにされつつあるが、不用意に「駒・白木・白城・唐・畑」などの地名を、「コマ(高句麗)・シラキ(新羅)・カラ(韓)・ハタ(秦)」などと渡来地名に当ててを慎しまねばならないことを強調して本稿を終りたい。

(注)

- (1) 神戸新聞社編(1975): 神戸の町名. のじぎく文庫
- (2) 福原潜次郎(1911): 神戸市地名考, 西撰大観 下巻
- (3) 福原会下山人(1967): 神戸市内町名由来記 上中下3巻
- (4) 落合重信(1969): 神戸町名解説粗稿, 歴史と神戸 第8巻別冊1
- (5) 川辺賢武(1973): 神戸の町名物語, 神戸史談 233号
- (6) 例えば川辺賢武の「神戸の《天城》の地名について(神戸史談 228号)」や落合重信の「川の合流点の地名学的考察(人文地理 16-5)」などがある。

- (7) 落合重信(1975): 神戸の歴史 後藤書店
 (8) 前掲 7) 47-48
 (9) 山中襄太(1968): 地名語源辞典 校倉書房
 (10) 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編(1974): 岩波古語辞典
 (11) 新村出編(1976): 広辞苑 第二版 補訂版 岩波書店
 (12) 吉田東伍(1969): 増補大日本地名辞書 上方2巻 485
 (13) 前掲 71
 (14) 蔵中進(1975): 母音交替 上代日本語音韻の一研究 131
 (15) 松岡静雄(1937): 新編日本古語辞典 302
 (16) 前掲 4) 5
 (17) 前掲 1) 156
 (18) 有馬郡誌 下巻 503
 (19) 竹内理三編(1976): 荘園分布図 上巻 28
 (20) 人文社版(1961): 日本分県地図地名総覧 岩手県1
 (21) 前掲 3) の上巻 8
 (22) 前掲 10) 82
 (23) 中外書房版(1976): 西撰大観 郡部 277
 (24) 平野庸脩編(1975): 播磨鑑(全) 歴史図書社 261
 (25) 前掲 12) 中国・四国 3巻 40
 (26) 前掲 6) 15-18
 (27) 前掲 3) 下巻 2
 (28) 前掲 10) 694
 (29) 前掲 5) 48
 (30) 前掲 5) 76
 (31) 前掲 1) 121
 (32) 拙稿(1973): 地名からみた親不知一桑名線の設定 地理科学 20号
 (33) 前掲 1) 117-118
 (34) 金達寿(1973-75): 日本の中の朝鮮文化 1-6巻 講談社
 (35) 段熙麟(1976): 日本に残る古代朝鮮 近畿編 創元社

(論者) 吉田茂樹 神戸市生田区花隈町115 (六甲高等学校教諭)